

司会：金 亮我（お茶の水女子大学大学院）

## 〈第1報告〉

# 『恍惚の人』についての検討

金 仁京

私は、有吉佐和子という方の『恍惚の人』とその周辺の作品を研究テーマとしています。『恍惚の人』は、1972年に発表された小説ですが、私がなぜこの作家を専攻したか、なぜこれを研究目的にしたかをお話させていただきます。

まず、この作家は、日本の戦前・戦後そして、高度経済成長期を生きた作家でありまして、この作家の作品を研究するというは、その時間の流れにともなう日本社会の変貌ぶりを知る端緒となるのではないかと考えております。この作品は、高齢化社会の問題を生々しく取り上げているのですけれど、韓国もこれには洩れず、急速な高齢化を迎えています。このことは、もう抽象的な話でなく、日本よりも早いスピードであるということ、後からまた申し上げる機会があれば、数字についてもふれさせていただきます。

有吉佐和子に対する一般大衆と文壇での相反する評価があります。この人はすごい人気があった作家だったと私は印象を受けています。その作品が映画化なり、舞台でとりあげられたり、テレビドラマ化されたりしていますが、芥川賞など賞からは洩れているんですね。そういう意味でなぜ相反する評価が下されるのか、一般大衆受けする何かの魅力が、純文学をする人たちからは倦厭されるのか、その部分について、私はまだはっきりとした書物などに接することができず、その理由は自分なりに手探り状態であります。

韓国では、有吉佐和子さんという方は無名に近いです。『恍惚の人』という作品は、確かに翻訳本も出ていますが、それほど出回っておらず、あまり人に読まれていません。ですから、この方は韓国では研究実績が少ないし無名に近いです。私は、実はこの人のファンです。それで文学的な評価云々ではなく、自分なりにこの人を愛しているので、研究を続けながら紹介ができればいいなと思っています。

『恍惚の人』の内容の中で、男性中心社会の中で

女性の社会進出の難しさの関連が描かれています。主人公はバリバリのキャリアウーマンではないんですが、法律事務所の事務員として働いています。そうしているうちに介護の問題にぶつかり、その負担を一手に自分で引き受けることになって、少し揺れ動くところができます。そういう点で関連を見ることができると考えています。このような状況というのは日本に限らず韓国のどこでもあり得ることなので、女性の社会進出が、かなりの比率で増えているとはいえ、家庭の中での女性の役割がないがしろにできないので、一つのモデルケースとしてこの作品を見て、韓国女性の抱えている問題を理解する判断材料になると思います。

有吉佐和子は1931年に生まれています。東京女子大の短大の英語科を卒業しています。カトリックの洗礼を受けたことは彼女の思想のベースになっていると思いますので、こういうものを今期勉強してきました。女子短大在学中も古典芸能に関心を持ち、演劇評論家を夢見ている、これが彼女の作品に色濃く出ています。彼女がデビューすることになる作品、『地唄』という作品があるのですが、歌舞伎や浄瑠璃に関係のあることをテーマにしています。有吉佐和子が文学界の新人賞候補から洩れた理由は、新人にしては古すぎるという評価だったからです。その後、様々な作品がありまして、1972年に『恍惚の人』が新潮社から刊行され、ベストセラーになります。このときは、日本で「恍惚」という言葉が流行語になったそうです。1984年、53才で杉並の自宅で急性心不全で死亡します。

『恍惚の人』のあらましを簡単に述べさせていただきます。

弁護士事務所事務員として働いている主人公昭子は、ある土曜日、仕事からの帰り道、顔色が変わってどこかに行きかけている舅と一緒に帰ることとなる。姑が起きないのでおなか

が空いていると言ってきた舅の話に驚き、離れ

に行ってみると、姑は玄関に倒れたまますでに死亡していた。しかし姑の突然死よりも昭子を当惑させたのは、舅がぼけてしまった事実だった。舅は自分の息子と娘の顔すら覚えておらず、いじめていた嫁とかわいがってもいなかった孫しか記憶しないのであった。結局葬儀を済ました後から、昭子は夫の協力も得られず一人で舅の面倒を見ることになる。しかし夜も徘徊を続けるぼけ老人を抱えて、仕事を続けることは不可能に近いことであった。昭子自身、現実打開策として社会福祉関係施設などを訪ねてみたりするが、福祉施設の職員からは、かえって老人ホームなどの施設に入れるより、家で見るのが最善だとの話を聞き苦しむばかりである。ある日昭子の長電話中に舅がお風呂でおぼれ急性肺炎になり危険な状態になるが、奇跡的に回復する。この事件に責任を感じた昭子は最善を尽くし面倒を見ることを心に誓う。

この作品で私が論点と考えているのは、こういう状況を設定するのが問題提起としての新鮮さがあるのかということですが、当時としては時代を先取りした作家の鋭い問題意識が充分現れた作品という評価が多いです。日本において2000年に介護保険が施行されていますが、韓国でも同じようなものが2006年2月7日に再提案が議決されているので、2007年か8年から施行されると思います。この作品が1972年のもので、保険そのものに彼女はふれてはいないんですけども、その必要性などを訴えているという意味で時代を先取りする問題提起があったのではないかと、という点については私も認めております。介護老人を抱えた家庭は、そのことを内緒にする傾向があるのではないかとと思うのですが、その介護の現実を、内容そのものは、かなりすさまじいものがあるんですけども、ユーモラスに取り扱い、社会問題として取り上げた点は新鮮でありました。読者が十分納得できそうな状況を描いているのです。そういう点で現実適合性もあると思います。作品の中での家族構成は、核家族化が進む中での標本的なもので、三人家族です。諸々の事情があって親との同居をすることになりますが、母屋ではこの親子三人が住み、離れて老夫婦が住んでいる設定で、食事なども別々にしたりして、それほど同居そのものが息苦しくないのです。夫の職業は商社マン、妻は法律事務所の事務員で経済的にも中産階級に属するの

ではないかと思えます。子どもは一人で高校生なので、いくらか介護に協力できそうな年齢、隣近所の方が葬儀の時に手伝ってくれたりするところから、まだまだ近所づきあいが残っている状態ではないかと思えます。昭子はかなり介護に疲れているんなところに相談に行きますが、当時としては社会的にも設備が整ってないわけです。痴呆老人を扱ってくれるところなど無いに等しく、養老院に入れるとか、精神病院に入れるとか、そのようなことは暗黙でなされていたようですが、それはこの作品には出ていません。ともかく、昭子が保護施設にいつて相談してみると、家で見ると一番良いですよと、言葉は柔らかかであっても、結局、突き返されるということなのです。

次の論点と思っているのが、登場人物の葛藤構造が、どれほど問題の本質をあらわにしているのかということですが、この介護の問題が家庭の中だけでは解決できないということ、登場人物間の葛藤と説得力のあるストーリー展開で描写していると私は思います。しかし、夫は、自分の父親が自分の将来の延長線上にあると思ひ、自分もそのようになるのではないかと不安がり、しかも商社マンである仕事柄、忙しいことを理由に介護には参加しません。夫の妹は自分の惚けた父親を嘲笑します。あざ笑うのです。そして自分の家が遠いことなどを理由に、結局葬儀が終わって初七日が過ぎた後にはもう介護には参加しないで帰ってしまう。昭子の息子は受験を控えているため、介護に参加するのは現実的には困難ですが、母親の相談にも乗ってくれたり、協力的なのです。それで、かえって主人公が負い目に感じるようになります。昭子は法律事務所勤めており、介護と仕事の両立の難しさに悩んでいるのです。

次に葛藤解消過程でどんなに説得力のある問題解決の糸口を提供しているのかという点で考えてみますと、介護の現実打開策を社会に求めようとはしていないのです。もちろん施設を尋ねたり、相談したりはしますが、積極的でなく、家で見た方が良いでしょうと言われたら帰ってしまうという程度です。だから男性中心社会の印象とイデオロギーに合う解決策を選んでいないかと印象づけられました。昭子自身は、夫にかなり不満はあります。夫の仕事に差し支えがないように、夫の立場を理解し、それほど強力に介護に参加させるということはないのです。義理の妹に対しても、あまり期待はせず、彼

女の立場を受容します。息子に対しては、介護に参加してくれることに感謝しながらも、負い目を感じているが、その息子が模擬試験で全国でもかなり成績が優秀であることで救われています、彼女の職場の上司や同僚も彼女と同じ境遇にいた経験があって、相談に乗ってくれたり、仕事の便宜を払ってくれたり、職場から自分が阻害されているのではないかという不安を打ち消しています。

有吉佐和子の作品が大衆に人気があり、ストーリーテラーとしての才能は認められつつも、文壇では評価されない理由について、明確に書かれているものは見あたりません。それでは有吉佐和子の作品にはどんな問題があり、どんな点で評価が分かれてし

まうのか？この点、問題の核心は彼女の作品が問題を浮き彫りにし、新しい世界を垣間見ることまではさせてくれるが、問題解決の仕方は中途半端で、既存の男性中心的なイデオロギーをベースに、現実妥協するかたちで問題を解決しようとする中で、新しい秩序と制度の形成の可能性を提示するまでには至らず作品が終結していることにあるのではないかと考えられます。

今後の追加的検討事項としては、この主題を扱った他の作品との比較、この作品についての他の論者の指摘についての検討、有吉佐和子の他の作品との比較、韓国の文化作品の中でこのようなテーマの扱い方などを考えています。

#### ◇ 質疑応答

**司会**：小説の内容が、現代のまさに今の時代を反映、現代に現れている社会問題に関係がありますので、そういう観点からの質問はどうでしょうか。

**フロアー（お茶）**：私自身わからなかったのですが、まとめの所に文壇で評価されないとあるのですけれども、文壇で評価されるというのは、なんとか賞受賞ということを考えていたのですが、そういうことではないんですか？有吉佐和子はいろいろ賞を受賞しているようなのですが。

**報告者**：彼女自身、芥川賞がほしいと自伝で言っているのですね。結局、芥川賞はもらっていないのです。芥川賞をもらってこそ一人前の作家なのかという疑問を私自身持っていますし、それについての答えがまだ得られていません。これだけの、かなりの作品を残していて、賞ももらっていて、人気もあって、売れっ子作家というレッテルが貼られているはずの人でありながら、文壇で評価されなくて、私は賞に恵まれなくてという愚痴をこぼしているんですね、彼女自身。ですから、私としては、やはり芥川賞をもらわないと純文学では認められてないというように作家でありながらも皆さん思っていると思うのです。

**フロアー（お茶）**：芥川賞をもらっていないという自伝は、いつ頃書かれたものですか？

**報告者**：これが出版されたのは2000年ですが、内容を読んでもみると、賞の候補になって落とされてそういうことを言っています。『太陽の季節』と競って賞を逃したあとに残念会をやってくれ、残念会をやってくれと言いつらして、みんなに生意気じゃないかといわれるのです。デビューしていくらも経っていないのに、その候補になっただけで儲けもんじゃないかというような評価をないがしろにして残念会をやれと言ったものですから。結局周りの人は残念会を開いてくれました。自伝そのものは有吉佐和子自身が書いていて、編解説が宮内順子さんという帝塚山学院大学の教授です。他の賞はほしいままに手にしているんですけども、

純文学からは自分は阻害されたということだからかなり根にもったんじゃないかという風に。

**フロアー（お茶）**：そのことを漏らしたというのは、芥川賞候補になって落ちた頃ということですか。

**報告者**：そうです。

**フロアー（お茶）**：私の認識が間違っただけですけど、芥川賞というのは新人の作家というか。

**報告者**：彼女は新人。それでも彼女は、自分が作家としての生活が25年たった後にも、四半世紀私は作家をやって、まだまだ芥川賞がほしいと言っているんですけど、ものすごい執念なんですけれども、なぜそれまでそれがほしいのかと考えるんですけども、やはりそれは主観的な問題ですから、社会的な評価とは別にこれがほしいというのは客観的な物差しでは判断できないものがありますから、25年たった後も芥川賞がほしいって言っているの、やっぱりそれが残念でならなかった人ではないかと思うんです。

**フロアー（お茶）**：本人は欲しかったかもしれないけれど、これはある一定の時期しかもらえない賞の可能性はある。それが取れてないからってイコール評価されてないということにつながるかどうか、ちょっと私はわからないのでそれをお聞きしたいのですけれども。

**報告者**：それはそうなんですけども、だから純文学では、新人だけがその賞をもらおうとしたら、それは、新人でない時期でもかなりいいものを書いているかもしれないですね。彼女が客観的な物差しで考えたときに、でも、文壇では評価されていないというふうな印象を受けているのは、これだけの賞をもらっていないながら彼女がそれだけ執着するのは、なぜかという疑問で。やはり、その賞をもらわないと一人前になっていない、ならないのかなというふうに私が憶測なんですけれども考えているわけなんです。

**司会**：逆にその文壇で評価される、特に芥川賞で選ばれて、選考される基準というか。

**報告者**：そうなんです。ですから選んだ評価を書いてある

ものがあるじゃないですか、文藝春秋に載ったりするわけですね。それを探しましたが、あまりにも簡単に、落ちたことについての評価、なぜ落ちたのかというのが出ているものもそんなに詳しく書いてないのです。所々、この関係者周辺の作家たちが、何か一つのエピソードみたいな形で語り合うという感じですね。それこそ、その後は、審査員が彼女の作品が新人にしては少し古すぎるとか、人情めいた話であるという評価で落とされているのです。だから、なぜ新人がこういうことを書いてはいけないのかと疑問を持つのですが、審査する人には、浪花節的な人情に訴えるものは、あまり良い印象を受けないのかなと思うんですね。

**司会**：たとえば、この本に対するその書評などはありますか。

**報告者**：ファンである人だとか、評論家の人だとか、いくつかあります。

**司会**：評価はどうなんですか？

**報告者**：評価は、彼女が問題提起している点で、彼女がとても時代を先取りしたテーマを扱っている、社会性があるということに絞られています。それを私も否定するわけではないのですが、問題の解決の仕方が、中途半端というか、そういう解決の仕方の方がうまくまとまるんですね。正面突破をして、柳のように曲がるわけではなく、竹のように割れてしまったら、結婚生活その場で終わりです。それは夫婦関係のみでなく、その周りの関係でもそうですけれど。ですから私が中途半端と表現する問題の解決の仕方が現実的には、ある意味では賢いかもしれないです。生きる上では、でも、介護の問題を考えたときに、この閉鎖された家庭の中で、ある一人が背負うべきなのかという点で疑問を感じているわけです。そして、全部抜け道があるんですね。私一人で我慢すればいいわというような形で解決をみるという点で私は中途半端と言っているわけで、彼女はかなり因習にとらわれた女性を描くのがうまい

という評価を受けているだけに、こういう解決の仕方は現実的ではあるのです。他の作品に描かれている女性の生き方そのものも、元気が出るような、すごく悲しいけれども笑いを誘うような描き方をしているのですから、それが生きる知恵なのかと思う反面、文学作品そのものが社会に与える影響や、その役割を、こうしなければいけないのよという定義を持って読んでしまうと、この作品は、そういう点では不備ではないかという印象を受けざるをえないところがあります。

**フロアー（お茶）**：カトリックの洗礼を受けたとかございましたが、この方の作品の中でカトリックの洗礼を受けたという結果が、どういう風に内容に表れているのかを教えていただけたらと思います。

**報告者**：『緋色』という作品がありますが、その作品は、そんなにカトリックそのものの、信者が出てくるというものではないのですが、戦争花嫁になった人が、アメリカに渡るのですが、その当時日本では、妊娠すると病院に行けば、人工中絶が簡単にできる時代だったようなんです。しかし、アメリカでは当時、特定の州を除けばそれができません。カトリック信者だから中絶ができないというような内容は出てこないんですけども、その戦争花嫁として一緒に船で渡っている人が何人か妊娠し、中絶をしようとしてもできず、かなりのお金をかけて、しかも闇でやらなければならない状況の中で、そんなに罪を感じるような表現はないのですが、逆に罪を感じない表現が出ているだけに、これはいけないんじゃないかなと感じてしまう、反面教師みたいな表現があるわけなんですね。で、そのほかにこれといって宗教的なものを感じたというのは、私は今まだ読んでないので、申し上げることはできませんが、『緋色』に関しましては、妊娠をした人が中絶をするにあたり持つ感想とかそういうものがありまして、なんとなくそれが滲んでいるのではないのかなと思いました。